

『セレスタリア』宇宙にうかぶ平和な世界

墨田区立二葉小学校四年

村杉 瑠美

わたしは今、『セレスタリア』というまちで暮らしている。ここは、地球の外、月の近くにある人工のリングに作られた宇宙の街。重力は地球の六分の一しかないため、歩くだけで体がふわっと浮く、まるで自分が風船になっただかのような世界。空を歩いているみたいな不思議な空間が広がる。

この街は、世界中の人が力を合わせて作った。ここで最初に作られたのは、太陽の光を集めるソーラーパネル工場と、水や空気を作るリサイクルセンターだった。そこから少しずつ、人が暮らせるドームや学校、病院などが作られ、今では何千人もの人がロボットたちといっしょに生活している。セレスタリアという名前には、大切な意味がある。『セレスティアル』は、『空・宇宙』のような『』という意味、『エリア』は、『世界

「や空間」という意味である。それを合わせて
 「セレスタリアリ宇宙にうかぶ平和な世界」と
 いう思いが込められている。「空のように
 美しく、世界中の人がいつでも集まれる場所
 にしたい」と、初めてここを設計した科学者
 が言った。

この街は、ただ近未来的なだけではない。
 太陽光、風、水といった自然の力をエネルギー
 に変えて暮らしている。ムダな電気は使わ
 ず、食べものの残りや水もロボットたちが管

理してくれて、リサイクルされる。「まるで
 地球よりエコじゃないか」と、地球から来た
 おじいちゃんが驚いたほどだ。

セレスタリアリでは、わたしたちの周りにい
 つもロボットがいる。学校の授業は学校に足
 を運ばなくても、バーチャルリアリティとい
 う仮想空間で受けることが多く、わからな
 いところはわたしの知識に応じたアシスタン
 トロボットがサポートを担う。

わたしの三歳の妹はどう暮らしているか想

像
で
き
る
？

おもちゃや欲しいもの、身の回りのものはスリーディプリンタでなんでも作ることができ
きるから、あの色が良かった。なんて後で
言い出しても簡単に作り出すことができる。
買ったものもおどろくことばかり。スーパ
の店員はロボットで、レジに行かなくても、
カメラで人を認証して、支払い完了。家にあ
る冷蔵庫とスーパがつながり、その時の天
候や気分に応じて、食材が届くのだ。

この街には、いろんな国の人がいる。日本、
アメリカ、フランス、中国、ブラジルなど、
世界中から来ている。でも言葉の心配はいら
ない。イヤホン型の通訳機がすべての言葉を
自動で訳してくれる。トボンジュールとフ
ランスの友達と言っても、こんなにちはと
聞こえるので、すぐに友達になれる。
また、国同士のちがいを超えて、だれもが
助け合っているのもこの街の特徴である。ロ
ボットも人も、違いを超えてチームで動く。

「ひとりでは作れない未来が、この街にはある。」

と先生が言っていたけれど、その通りだ。

セレスタリアでは、月に近いこともあって、夜の空に地球が見える。それは青く、まるで、とても美しい。

「あれが、わたし達の出発点だね。」

と母が言った。

最初の頃は、暮らしにとまどうこともあった。重力が違うから、シャワーの水が空に

ういてしまい、あわててぬぐったこともある。

歩くのにもコツがいり、すべてこけたり、

かべにぶつかったりした。ここで本当に暮

らせるのかな。と不安になったこともあった。

でも今では、この街はわたしの大切な場所

だ。便利なシステムやロボットに囲まれなが

ら、人と人が手をとって生きてる街。

国も言葉も違っても、ひとつの未来の家

旅のようになれる場所。それが、ここ、セ

レスタリアである。

そして、わたしは知っている。この未来の街は、ロボットだけでは作れなかつたことを。どんなに便利な技術があつても、そこに人の思いやりや工夫がなければ、本当にやさしい暮らしは生まれない。『ロボットは道具のでも、未来は人がつくるんだ』とわたしは思う。人がいるからこそ、ロボットも学習し、新しい技術も生まれていく。わたしは大きくなったら、この街でエネルギーの研究をしたい。そして、も『いろいろな人がこの街に来られるようにしたい。』

『宇宙なんて遠い話じゃない。わたしたちの明日なんだよ』と、いつか地球に伝えたい。